

編集委員長 梶光一

副編集長 横山真弓

1. 「野生生物と社会」発刊状況

昨年の総会以降、2014年2月に創刊号を発刊、続いて、1巻2号を7月に発刊した。

1巻1号（創刊号）：原著論文3報、短報1報、報告1報、計6報掲載（2月発送）

1巻2号：特集記事6報、原著論文3報、シンポジウム報告3報、計12報掲載

（7月発送）

2. 10月30日までの投稿・査読状況

・2014年投稿数

13本（10月30日現在）（参考値：2013年は特集論文含めて16本/年）

・受理 2013年投稿分2本

2014年投稿分2本（うち1本は特集記事へ掲載済み） 印刷待ち 3本

・却下 3本

・査読中（査読1回通過 4本、査読中 3本）

- ・（現状）投稿数は順調に増えている。査読もおおむね3か月以内に返送している。半年に1度の発刊は可能な正常なペースとなっている。

3. 編集作業の課題

①発刊計画の策定について

4月の新編集体制のスタート段階で1号発刊が遅れており、その遅れを取り戻そうとすると、現在の投稿数では不足している。Invited paper、特集等の企画が必要。大会シンポジウム等の論文化の促進を検討する。ただし、印刷待ち原稿がある中で、特集企画のみを優先することは避ける。企画を計画し、次回理事会までに発刊計画を策定する。

②査読期間の短縮

・会員内では、査読適者が少なく、また一部の査読者が集中する傾向があるなどの課題が多く、査読決定までに時間を要している。また、長期出張、海外出張などが多いため、査読期間を長く要望されるケースもある。再度査読者を探す手間と時間を考えると、条件付きでも依頼するほうが早いと判断するケースが多い。査読環境の改善が必要である。

→査読者の幅を広げるために、編集長と副編集長に会員名簿を定期的に開示してもらい

たい。

- ・投稿者の論文完成度を高め、ケアレスミスをなくすため、投稿チェックリスト表を作成し、投稿時に提出してもらう。

- ・不備のある論文は、査読に回す前に責任編集者の段階で著者に差し戻すなどの対応を行い査読者の負担を低減する。

③査読工程のルール化、マニュアル化

- ・査読を進めていくうえでのルールがなく、その都度の事務局⇄編集部とのやり取りが必要となっている。最低限のルールを設定し、事務局に来た問い合わせに対して、ルールで回答してもらうことが必要。

- ・投稿後の工程について、時限を設定する必要がある。

(案)

投稿から編集委員確定、査読者依頼までを約 10 日

査読期間 3 週間

査読後の原稿修正 3 週間

再査読 2 週間

- ・責任編集者の作業内容をリスト化する。

4. 次号 2 巻 1 号の発刊計画

6 本の論文掲載を目指して、1 月発刊を目指す。